

# 旧ユーゴスラヴィア諸国の学校教科書における国民史と地域史

National and Regional History in the School Textbooks of the Yugoslav Successor States

石田 信一

Shinichi ISHIDA

## 要旨

一九九〇年代前半に分離・独立を達成した旧ユーゴスラヴィア諸国は、学校教育制度の見直しをはかるとともに、「脱イデオロギー化」と「脱ユーゴスラヴィア化」を特徴とする歴史教科書や地理教科書の抜本的な改訂作業を行なうことになった。ユーゴスラヴィア史は否定的に描かれ、かつての「ユーゴスラヴィアの他の民族」の歴史はほとんど顧みられなくなった。本稿では、学校教科書の「脱ユーゴスラヴィア化」による「国民史」と「地域史」の視点の変化について考察した。各国の「国民史」として刷新された学校教科書において、かつての「我が国の諸民族」がどのように位置づけられているのか、またユーゴスラヴィア史もしくはそれにかわる「地域史」としてどのようなものが記述されているのか、セルビア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの教科書を対象として、連邦時代のものも参照しつつ分析した。

連邦解体後の二〇年余りを通じて、程度の差こそあれ各国とも歴史教科書をはじめとする学校教科書の「脱ユーゴスラヴィア化」を進めたが、ユーゴスラヴィアにかわる広域的・跨境的な「地域史」の視点はなお獲得できず、やや偏狭な「国民史」の側面だけが強められている。かつてのユーゴスラヴィア諸民族が教科書に登場する頻度は非常に低くなり、断片的な情報しか与えられず、とくに現代史では敵対的に描かれることも少なくない。こうした状況に対応して、一九九〇年代後半から各国の研究者・教育者らによる国際会議やさまざまなプロジェクトが試みられてきたものの、その成果は限定的なものとどまるばかりか、歴史認識の政治利用といった問題も顕在化しつつある。

## はじめに

ユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国（旧ユーゴスラヴィア連邦）が解体して四半世紀が過ぎようとしている。凄惨な内戦が展開された第二次世界大戦以降、チトー率いる共産党政権が掲げた「友愛と統一」のローガンの下に六つの共和国からなる多民族国家として相対的な安定を保っていたユーゴスラヴィアは、一九九一年から九二年にかけてスロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナと連鎖的に起こった紛争によって分裂・解体した<sup>(1)</sup>。六つの共和国のうち上記三共和国とマケドニアの独立後も、なおセルビアとモンテネグロはユーゴスラヴィア連邦共和国（新ユーゴスラヴィア連邦）を称していたが、ほとんど実体を伴わないこの名称も二〇〇三年に放棄され、ユーゴスラヴィアは消滅した。その後、セルビアとモンテネグロも完全に分離し、さらにセルビアからコソヴォが独立している。本稿では、これら七つの共和国を旧ユーゴスラヴィア諸国と呼ぶ。

旧ユーゴスラヴィア連邦は一九七四年憲法体制下において六共和国・二自治州（ヴォイヴォディナとコソヴォ）に広範な自治を認める分権体制をとっており、例えば初等・中等教育の学校教科書は全国統一ではなく共和国（場合によって自治州）ごとに出版されていた。とくに歴史教科書は各共和国の主要民族の歴史、クロアチアであればクロアチア史、セルビアであればセルビア史に焦点をあてており、ある人物や事件を取り上げる際の分量の違いは大きかったものの、歴史認識あるいは

個々の事件に対する評価の違いが目につくほどではなかったし、何よりもユーゴスラヴィア諸民族およびユーゴスラヴィア国家の歴史を総じて融和的な姿勢で描いていたように見える。クロアチアにおける歴史教育の専門家であり歴史教科書の執筆者でもあるザグレブ大学のスニエジヤナ・コレンによれば、一九八〇年代のクロアチアの歴史教科書の内容の「約二〇%から三〇%がクロアチア史に、三〇%から四〇%が『ユーゴスラヴィアの他の民族』の歴史に、三〇%が著しく西洋世界に偏った世界史に、それぞれ割り当てられて」おり、しかも「我が国の諸民族」（ユーゴスラヴィアの他の民族）に関して「教科書から受けるイメージは肯定的なもの」<sup>(6)</sup>であって、「ほとんど理想化された『我が国の諸民族』間関係が描かれ」ていたという。一般的な歴史認識に関して言えば、とくにクロアチアとセルビアの相違は、すでに「八〇年代に『経済危機』が進行するに伴い、それぞれの民族主義的傾向が強まるなかで、修復できないほどに広がっていた」という指摘もあるが、それは学校教科書に反映されていたわけではない。

しかし、一九九〇年代前半に分離・独立を達成した旧ユーゴスラヴィア諸国は、学校教育制度の見直しをはかるとともに、「脱イデオロギー化」と「脱ユーゴスラヴィア化」（あるいは「再国民化」）を特徴とする歴史教科書や地理教科書の抜本的な改訂作業を行なうことになった。ユーゴスラヴィア史は新たな「国民史」の視点から否定的に描かれ、かつての「ユーゴスラヴィアの他の民族」の歴史はほとんど顧みられなくなった。とくにクロアチアでは、かつてユーゴスラヴィア地域を支配して

いたオスマン帝国やハプスブルク帝国などに対して見られた敵対的な記述が隣人たるセルビア人に向けられるようになる一方、<sup>(10)</sup>その他の民族に関する記述はきわめて限定的なものとなった。クロアチア以外の国々の学校教科書でも、隣国あるいは隣人に対する敵愾心や無関心を看取することができるが、必ずしも同じ傾向を持つわけではない。その概況については後述する。

本稿では、学校教科書の「脱ユーゴスラヴィア化」による「国民史」と「地域史」の視点の変化について考察する。各国の「国民史」として刷新された学校教科書において、かつての「我が国の諸民族」がどのように位置づけられているのか、またユーゴスラヴィア史もしくはそれにかわる「地域史」としてどのようなものが記述されているのか、連邦時代のものも参照しつつ分析することとしたい。<sup>(11)</sup>

なお、本稿は平成二七年度跡見学園女子大学特別研究助成費（研究課題「旧ユーゴ諸国の歴史学と歴史教育・教科書に関する総合的研究」）による研究成果の一部である。

## 1. 連邦時代の学校教科書

ユーゴスラヴィア連邦が深刻な経済危機に直面し、各地でナシヨナリズムが再燃しつつあった一九八〇年代末においても、ユーゴスラヴィアの一体性が疑われることはなかったし、学校教科書においても総じてユーゴスラヴィア全土（各地方・各民族）に対する目配りがなされていた。

ここでは、まずセルビアの小学校四年生向け「社会知識」教科書の事例を取り上げたい。<sup>(12)</sup>

この「社会知識」教科書は三部構成となっており、ユーゴスラヴィア全土の概況、経済地理、歴史が順番に描かれている。冒頭には、統合の象徴たる故チトー大統領の大きな写真がある。それに続き、ユーゴスラヴィアの国旗と国歌（「スラヴ人よ」、歌詞・楽譜つき）、さらに各共和国の国旗と国章、さらに各共和国・自治州の首都の写真等が掲載されている。首都ベオグラードに関してはやや詳しく描かれているものの、それ以外ではとくにセルビアに重点が置かれているわけではなく、また各共和国・自治州の区別もほとんどないままに、平野部、山岳部、沿海部といった区分でユーゴスラヴィア全土に関する地理的な記述が続く。<sup>(13)</sup> 歴史に関する部分では、スラヴ人のバルカン移住に始まるユーゴスラヴィア諸民族史が簡潔に描かれ、とくに統一国家形成に貢献した人物としてクロアチアのリュデヴィト・ガイ、セルビアのスヴェトザル・マルコヴィチ、スロヴェニアのフランツェ・プレシエレン、モンテネグロのペタル・ペトロヴィチ・ニェゴシュが挙げられているほか（各民族への配慮とも思われる）、戦後の連邦国家の基礎となる第二次世界大戦下の「人民解放戦争と社会主義革命」について詳述されている。いずれの場合も、ユーゴスラヴィアの一体性が強調される形になっている。なお、ユーゴスラヴィア以外の国々に関する記述は非常に限定的で、隣国（オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ギリシア、アルバニア、イタリア）を羅列するにとどまり、自らの地理的位置に関し

でも、ヨーロッパの一部であり、バルカン半島の一角を占め、アドリア海への出口を持っているという程度の記述しかない。

この「社会知識」に続く「地理」と「歴史」の教科書も、ユーゴスラヴィア全土に関する地理的・歴史的記述が重視されている点が変わらない。続いて、とくに「社会主義自主管理の基礎」を含む小学校八年生向けの地理教科書と歴史教科書の事例を取り上げたい。<sup>(14)</sup>

地理教科書では「私たちの国土の地理的位置は、何よりもバルカン的であるが、アドリア海⇨地中海的、中欧的、沿ドナウ的でもある」とされている。また、地理的区分においては、ユーゴスラヴィアは南欧諸国の一つであり、「南東欧最大の国」<sup>(16)</sup>として自らを位置づけている。続く自然地理・経済地理に関する記述は、すべてユーゴスラヴィア全土を対象とするものとなっている。全一章のうち第九章では各共和国・自治州の地誌が取り上げられているが、この章でさえセルビアに関する説明が若干長めという程度である。

一方、歴史教科書では、表紙にチトーの写真が、冒頭にほぼ全頁を使ったチトーの肖像画が掲載されている。この教科書が取り扱う範囲は、第一次世界大戦からチトー逝去（一九八〇年）までであり、全体では「第一次世界帝国主義戦争と十月社会主義革命」、「両大戦間期の世界」、「両大戦間期のユーゴスラヴィア」、「第二次世界大戦とユーゴスラヴィア人民の社会主義革命」、「第二次世界大戦後の世界の全般的状況」、「ユーゴスラヴィアにおける革命の成果および平和と各国の平等な関係を求める我が国の闘い」、「ユーゴスラヴィアにおける自主管理社会主義社会建

設の歴史的意義」の全七章で構成されている。セルビア史の要素は非常に限定的にしか見られない。さらに、本文一四九頁のうち六〇頁を「第二次世界大戦とユーゴスラヴィア人民の社会主義革命」にあて、しかもその大半がユーゴスラヴィア史に関する記述となっていることが特徴の一つである。セルビアもしくはセルビア人に焦点が当てられているわけでもない。例えば、人民解放戦争に参加した作家や芸術家を列記する際も、セルビア人は半数ほどで、クロアチア人が次に多く、ボスニア・ムスリムやユダヤ人、スロヴェニア人なども登場する。<sup>(18)</sup>

なお、同じ時期のクロアチアの学校教科書には、やや異なる傾向も見られる。例えば、上記のものと同じ小学校八年生向け地理教科書には「ヨーロッパ、ソヴィエト連邦、ユーゴスラヴィア」という副題があり、取り扱う範囲が大きく異なる。<sup>(19)</sup> ヨーロッパ地誌に一四六頁があてられているのに対して、ユーゴスラヴィア地誌は六八頁を占めるにすぎない（ソヴィエト連邦は二六頁）。もつとも、セルビアの場合と同じくユーゴスラヴィア全土を対象とする記述がほとんどであり、各共和国・自治州の紹介でも、クロアチア一〇頁、セルビア八頁という程度で、クロアチアに関する記述が突出しているわけではない。一方では、ユーゴスラヴィアの地理的位置に関して、「アドリア海に面しているため地中海国家とも、またドナウ川流域の中流部に位置するため大陸部⇨沿ドナウ国家とも定義することができる」<sup>(20)</sup>と述べており、セルビアとの違いが明白である。しかも「ユーゴスラヴィアをバルカンの国と呼ぶことが多い。しかし、この呼称は適切ではない。サヴァ川とドナウ川に引かれたバルカン

半島の北の『境界』とされているものは、かつて北側のオーストリア＝ハンガリー領と南側のオスマン帝国領の間に人為的に引かれた境界線だからである<sup>(21)</sup>という説明さえある。また、この教科書はヨーロッパを「地中海諸国」、「大西洋諸国」、「ヨーロッパ大陸部」に三区分し、ユーゴスラヴィアを「地中海諸国」の一つとしている<sup>(22)</sup>。

これに比べれば、同じ小学校八年生向け歴史教科書は、セルビアとの本質的な違いはないように見える。「両大戦間期の世界」、「両大戦間期のユーゴスラヴィア」、「第二次世界大戦、ユーゴスラヴィア諸民族の解放闘争と社会主義革命」、「第二次世界大戦後の世界」、「社会主義ユーゴスラヴィアの発展」の各章からなり、クロアチアとの関連づけが試みられている部分があるものの、ユーゴスラヴィア史として描く姿勢は一貫している。

こうした傾向は小学校三～四年生向け「自然と地理」の副読本（郷土誌）や地図帳からもうかがうことができる。とくに地図帳には、クロアチアだけでなくユーゴスラヴィア全土の地理や歴史に関する地図や写真・イラストが豊富に掲載されており、統一の象徴と見られる「同志チトー——現代の偉人」に加えて、ユーゴスラヴィア全土から選び抜いた「文化的・歴史的記念物」や「革命と人民解放闘争の記念物」といった項目がある<sup>(24)</sup>。

また、中世・近世史を取り扱う小学校六年生向け歴史教科書においては南スラヴ諸民族と「現在のユーゴスラヴィアの少数民族」の歴史がやや羅列的ながら一体的に描かれ、さらにユーゴスラヴィア建国に至る近

代史を取り扱う小学校七年生向け歴史教科書においては「ユーゴスラヴィア諸民族」の歴史が同じように描写されている<sup>(25)</sup>。後者の場合、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人、ムスリム人、マケドニア人、モンテネグロ人からなる南スラヴ諸民族の間でのユーゴスラヴィア統一思想の発達とあわせて、ユーゴスラヴィア国内の少数民族（ただし呼称はマイノリティではなくナショナルリティ）として位置づけられていたアルバニア人、ハンガリー人、チェコ人、スロヴァキア人、イタリア人、トルコ人、ルーマニア人、ロマ、ユダヤ人などについても簡潔な説明がなされていることが特徴的である<sup>(26)</sup>。

## 2. 現在のセルビアの学校教科書

セルビアの学校教科書は長らく教科書局がほぼ独占していたが、二〇〇七年にクレット社が参入してから短期間に種類が急増した。二〇一五年現在、一八七八年以降の近現代史を扱う小学校八年生向けの歴史教科書だけでも、教科書局とクレット社に加え、BIGZ社、フレスカ社、ナロドナ・クニガ・アルファ社、エドゥカ社（二種類）、ノヴァ・シュコラ社、あわせて八種類に達している<sup>(27)</sup>。

この現代史に焦点をあてた小学校八年生向けの歴史教科書の構成（章立て）は、エドゥカ社の事例を挙げれば、次の通りである（括弧内は章扉と「まとめ」を除く本文の頁数）。「一九世紀後半と二〇世紀初頭の世界」（一四頁）、「ベルリン会議から第一次世界大戦までのセルビア、

モンテネグロおよびハブスブルク帝国とオスマン帝国のセルビア人」(二五頁)、「現代、第一次世界大戦、ロシアとヨーロッパの革命」(一四頁)、「第一次世界大戦中のセルビアとモンテネグロ」(八頁)、「両大戦間期の世界」(二六頁)、「ユーゴスラヴィア人の王国」(二二頁)、「第二次世界大戦——総力戦」(二五頁)、「第二次世界大戦中のユーゴスラヴィア」(二七頁)、「第二次世界大戦後の世界」(九頁)、「第二次世界大戦後のユーゴスラヴィア」(二二頁)。セルビア史またはユーゴスラヴィア史に関する章と世界史に関する章が明確に区別され交互に登場しており、前者が七四頁(五二%)、後者が六八頁(四八%)を占めている。その点では「国民史」の比重が高いものの、依然としてユーゴスラヴィア史としての記述が見られ、セルビアもしくはセルビア人にだけ焦点があてられているわけではない。

このエドゥカ社の教科書には両大戦間期の文化的状況を描く「ユーゴスラヴィア文化空間 (Jugoslovenski kulturni prostor)」という一節があり、作家のイヴォ・アンドリチ、ミロシュ・ツルニャンスキ、ミロスラヴ・クルレジャ、ラストコ・ペトロヴィチ、イシドル・セクリチ、科学者のミハイロ・ペトロヴィチ・アラス、ミルティン・ミランコヴィチ、ヨヴァン・ツヴィイチ、スロボダン・ヨヴァノヴィチ、ニコラ・テスラ、ミハイロ・プピン、クセニヤ・アナスタシエヴィチ、画家のペタル・ドブロヴィチ、ミラン・コニョヴィチ、サヴァ・シユモノヴィチ、ペタル・ルバルダ、彫刻家のイヴァン・メシュトロヴィチ、ロイゼ・ドリナル、音楽家のステヴァン・フリステイチ、ペタル・コニエヴィチ、ミハ

イロ・ミロイェヴィチらが取り上げられている。<sup>(29)</sup>クルレジャ、メシュトロヴィチ、ドリナルなど一部の例外を除いて、セルビア人とみなされる人物またはセルビア出身者が大半ではあるものの、現在の国家の範囲にしか視点が向けられていないセルビア以外の旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書とはまったく異なるものとなっている。

一方、クレット社の小学校八年生向け歴史教科書には上記「ユーゴスラヴィア文化空間」に該当する箇所に「ユーゴスラヴィア王国の社会」という一節がある。<sup>(30)</sup>ここではユーゴスラヴィア全土の日常生活からジャーナリズムやスポーツに至る文化的状況が描かれ、前述のクルレジャやメシュトロヴィチといった人物も登場する。

後述するクロアチアの歴史教科書と比べて、セルビアの歴史教科書は第二次世界大戦後の現代史に関する記述が少なく、しかも政治史の偏重が目につく。しかし、クレット社の歴史教科書には「社会主義ユーゴスラヴィアの社会」という一節があり、ここではセルビアだけでなくユーゴスラヴィア全土の文化的状況が描かれている。<sup>(31)</sup>とくにポップ・カルチャーに関してはユーゴスラヴィア全土の共通性が強調されており、ユーゴスラヴィアのロック・バンドとして、ベオグラードを拠点とするものに加えて、ザグレブを拠点とするタイム、プルリャヴォ・カザリシュテ、アズラ、フィルム、ハウストル、サライエヴォのビイエロ・ドゥグメ、スコピエのレプ・イ・ソルなども挙げられている。スポーツに関しても同様で、ユーゴスラヴィア代表チームの活躍を描くとともに、各地のスポーツ・チーム(サッカーではザグレブのダイナモ、スプリトのハイド

ウクなど、バスケットではザグレブのツイボナやスプリトのユーゴブラステイカなどを含む）の紹介、さらに一九八四年開催のサライエヴォ・オリンピック冬季大会や一九八七年開催のザグレブ・ユニバーシアードに関する記述もある。

このほかの学年の歴史教科書においても、なおユーゴスラヴィア諸民族・諸地域への視点を見て取ることができるとある。例えば、六年生向け教科書には「南スラヴ人のバルカン半島への到来」、「スラヴ人のバルカン半島への移住の結果」、「セルビア人の到来と一一世紀までのバルカン半島」、「スラヴ人のキリスト教改宗」、「中世前期の終焉」などの項目があり、セルビア人だけでなく同時代のクロアチア人やブルガリア人、さらにボスニア・ヘルツェゴヴィナなどの状況についても触れられている。<sup>(32)</sup> この教科書の後半部分はドウシヤン帝の時代に最盛期を迎える中世セルビア国家に焦点をあてており、「国民史」としての性格が強いものの、オスマン帝国のバルカン半島進出との関係も含めて、「地域史」としての特徴も持っている。一方、七年生向け教科書では、セルビア人とセルビア国家を描く「国民史」としての性格がいつそう強められ、南スラヴ人やバルカン半島といった括りの項目はいつさいない。<sup>(33)</sup> それでも、オーストリアとオスマン帝国に関する記述が詳しく、クロアチアやボスニア・ヘルツェゴヴィナの状況に触れており、またドウブロヴニクやモンテネグロに関する項目もあることから、かつての「我が国の諸民族」の範囲と重なるような広域的・跨境的な「地域史」の視点も失われてはいないように見える。

### 3. 現在のクロアチアの学校教科書

クロアチアでは、学校教科書は連邦時代からシュコルスカ・クニガ社がほぼ独占してきた。こうした状況はセルビアと変わらない。しかし、歴史教科書に限っても、クロアチアでは一九九六年にアルファ社、ピロテフニカ社、プロフィール・インターナショナル社が新たな教科書出版社として認められ、さらに二〇〇〇年以降はシュコルスカ・クニガ社とプロフィール・インターナショナル社が同じ学年向けに複数の教科書を出版するとともに、メリディヤニ社、リエヴァク社といった出版社の新規参入が続いた。もつとも、歴史教科書に限らず、この時期の学校教科書は一九九〇年代半ばに策定され、その民族主義的な傾向から批判されることも多い学習指導要領に準拠していたため、内容の多元化には至らなかった面もある。<sup>(34)</sup> それが実現するのは、少なくとも小学校向けの学習指導要領が改定され、教科書に記載すべき事項の制約が大幅に緩和された二〇〇六年以降のことである。<sup>(35)</sup> 一般的には従来の教科書の改訂版という形になることが多かったものの、アルファ社やシュコルスカ・クニガ社の歴史教科書のように執筆者を差し替えた完全な新版を出すケースもあった。<sup>(36)</sup>

クロアチアの学校教科書は二〇一〇年から原則として四年に一度だけ更新されることとなり、最近では二〇一四年に最新版が刊行されている。小学校向けの教科書の構成（章立て）は学習指導要領で定められて

いるため、教科書ごとの違いはほとんど無いが、各章の分量は大きく異なる。例えば、シユコルスカ・クニガ社とアルファ社の小学校八年生向け歴史教科書を比較すると、次のような結果となる（括弧内は章扉と「まとめ」を除く本文の頁数）。前者は「ヴェルサイユ体制」（一〇頁）、「両大戦間期の民主化プロセス」（一八頁）、「両大戦間期の全体主義体制」（二〇頁）、「第一のユーゴスラヴィアにおけるクロアチア」（二六頁）、「世界とクロアチアにおける二〇世紀前半の科学と文化」（二二頁、うちクロアチア三頁）、「第二次世界大戦」（四二頁、うちクロアチア一六頁）、「冷戦期の世界」（二二頁）、「脱植民地化」（一〇頁）、「第二のユーゴスラヴィアにおけるクロアチア」（二〇頁）、「独立クロアチア国家の成立と発展」（二八頁）、「二世紀初頭のクロアチアと世界」（二〇頁、うちクロアチア三頁）。この教科書では同じ章における世界史とクロアチア史の区別は明確ではないが、世界史に一三二頁（六一％）、クロアチア史に八六頁（三九％）をあてている。これに対して、後者は「ヴェルサイユ体制」（八頁）、「両大戦間期の民主化プロセス」（一〇頁）、「両大戦間期の全体主義体制」（一〇頁）、「第一のユーゴスラヴィアにおけるクロアチア」（一八頁）、「世界とクロアチアにおける二〇世紀前半の科学と文化」（二二頁、うちクロアチア五頁）、「第二次世界大戦」（三四頁、うちクロアチア一七頁）、「冷戦期の世界と共産主義体制の崩壊」（二二頁）、「世界の脱植民地化プロセス」（六頁）、「第二のユーゴスラヴィアにおけるクロアチア」（二四頁）、「独立クロアチア国家の成立と発展」（三〇頁）、「三千年紀の幕開けのクロアチアと世界」（二二頁、うちクロアチア三頁）であり、世界史に七九頁（四八％）、クロアチア史に八七頁（五二％）をあてている。章題の違いはわずかであり、本質的なものではないと考えられるが、各章の分量の違いは世界史とクロアチア史の比重を逆転させるほどになっている。アルファ社の教科書において一九九〇年代のユーゴスラヴィア紛争（クロアチアにとっての「祖国戦争」）に関する記述が非常に詳しいことは、一九九〇年代から続くクロアチア・ナシヨナリズムをなお強く反映している結果とも考えられる（シユコルスカ・クニガ社のものと比べて総頁数が二割以上少ないにもかかわらず、当該箇所の内容は二倍近くに達している）。<sup>(38)</sup> もつとも、いずれの教科書も一貫してクロアチア史としての「国民史」を描いており、ユーゴスラヴィア諸民族・諸地域への視点はほとんど失われている。

いわゆる文化史に関しても、「国民史」として描く姿勢は徹底している。そもそも描かれるのは両大戦間期でも第二次世界大戦後でも「クロアチアにおける科学と文化」であって、ユーゴスラヴィア全土を対象とするものではない。アルファ社の教科書には、両大戦間期のクロアチア文化・学術の発達に関する詳しい記述があり、取り上げられている人物や作品・業績も多いが、ユーゴスラヴィア王国における位置づけや他の地域との関連については全く記されていない。<sup>(39)</sup> なお、この教科書の特徴の一つとして「クロアチア独立国における文化活動とメディア」について独自の項目を設けていることが挙げられる。<sup>(40)</sup>

第二次世界大戦後の文化的状況に関しては、シユコルスカ・クニガ社の教科書の記述が比較的詳しい。もつとも、ポップ・カルチャーとの関



連で、一九六〇年代から八〇年代にかけて活動していた数多くのロック・バンドや歌手の名称が挙げられているもの、ユーゴスラヴィアのロック・バンドでクロアチア以外に拠点があったものはサライエヴォのビエロ・ドウグメに限られている。<sup>(41)</sup>この教科書はスポーツに関する記述も多いが、アルペン・スキーマニアのヤニツァ・コステリチ、バスケットのドラジェン・ペトロヴィチ、走り高跳びのブランカ・ヴラシチ、テニスのゴラン・イヴァニシエヴィチなどクロアチア人へのみ言及しており、一九八四年開催のサライエヴォ・オリンピック冬季大会にさえ全く触れていない。<sup>(42)</sup>

このほかの学年の歴史教科書においても、ユーゴスラヴィア諸民族・諸地域への視点はほとんど見られない。各章のタイトルや見出しから「南スラヴ」という用語は削除されている。ボスニア・ヘルツェゴヴィナに関する記述を別にして、どの教科書にも共通しているのは、スラヴ人のバルカン移住と関連してラシユカやドゥクリヤなどへの言及が僅かにあり、オスマン帝国の衰退と関連してセルビアとモンテネグロの独立運動が取り上げられていることなどに限られる。<sup>(43)</sup>

このように、現在のクロアチアの歴史教科書はクロアチア史とやや断片的な世界史で構成され、南東欧（バルカン）のような広域的・跨境的な「地域史」の視点を欠くだけでなく、ユーゴスラヴィアという枠組みさえも、政治史・軍事史を含めて、非常に限定的にしか用いられていない。ある地理教科書は、ヨーロッパ連合がクロアチアを「西バルカン」の一部として扱ってきたことに対して、「クロアチアが地理的、社会的、

歴史的にバルカン諸国に含まれたことはない」と反論するコラムを掲載している。こうした意識が、バルカン諸国の一つとしてのユーゴスラヴィア史に組み込まれることを拒否する姿勢につながっているとも考えられる。冒頭で述べた歴史教科書の「脱ユーゴスラヴィア化」、そして「再国民化」は、クロアチアでは着実に進行し、新たな「地域史」の視点を獲得できないまま定着してしまったかのように見える。

#### 4. 現在のボスニア・ヘルツェゴヴィナの学校教科書

ボスニア・ヘルツェゴヴィナは大別してボスニア・ヘルツェゴヴィナ連邦（以下、連邦側）とセルビア共和国（以下、共和国側）で構成される。連邦側と共和国側で学校教育制度は異なり、なおかつ連邦側ではボスニア（ボシュニャク）人とクロアチア人で異なる教科書の使用が認められている。<sup>(45)</sup>主に二〇世紀の現代史を扱う小学校九年生向けの歴史教科書（クロアチアやセルビアと違い、小学校は九年制に移行している）を見てみると、連邦側のボスニア人向けは一種類、クロアチア人向けは三種類、共和国側（主としてセルビア人向け）は一種類のみとなっている。<sup>(46)</sup>共和国側の教科書は外国語を除いて教科書・教材局による国定教科書となっているが、連邦側には数多くの教科書会社が存在しており、ボスニア人向けの小学校九年生向け歴史教科書が一種類しかないのは、むしろ例外的と言える。<sup>(47)</sup>

これらの教科書のうち、主としてボスニア人向けの教科書の構成（章

立て)は、次の通りである(括弧内は章扉を除く本文の頁数)。<sup>(48)</sup>「第一次世界大戦前のヨーロッパ・非ヨーロッパ諸国」(一四頁)、「第一次世界大戦」(二二頁)、「両大戦間期の世界」(三四頁)、「第二次世界大戦」(二二頁)、「現代(一九四五〜二〇〇〇年)」(二四頁)、「二〇世紀のボスニア・ヘルツェゴヴィナ」(六五頁)。教科書の前半と後半で世界史とボスニア・ヘルツェゴヴィナ史に二分され、前者が一〇六頁(六二%)、後者が六五頁(三八%)を占めている。クロアチアの場合と同じく、ユーゴスラヴィア全土を視野に入れた記述は少ないが、ボスニア・ヘルツェゴヴィナという国家の枠組みを重視し、必ずしもボスニア人にとつての「国民史」としていない点が大きく異なる。とくに文化史に関しては、どの民族(ボスニア人、セルビア人、クロアチア人)かを問わず、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ出身者が数多く取り上げられている。<sup>(49)</sup>このほかの学年の教科書でも、「中世のボスニア」、「一八世紀末までのオスマン時代のボスニア」、「一九世紀のボスニア・ヘルツェゴヴィナ」などボスニア・ヘルツェゴヴィナという国家の枠組みを重視した項目(章)が続く。<sup>(50)</sup>その一方で、「中世の南スラヴ諸国」、「一六世紀から一八世紀末までの南スラヴ諸邦」、「近隣諸国における民族覚醒」(「クロアチア民族再生」イリリア主義)、「セルビア蜂起と『ナチェルターニエ』」、「モンテネグロの国家建設」からなる)など近隣諸国の動向を取り上げる項目もあり、広域的・跨境的な「地域史」の視点がないわけではない。

一方、共和国側の教科書の構成(章立て)は、次の通りである(括弧内は章扉を除く本文の頁数)。「一九世紀後半と二〇世紀初頭のヨーロッパ

と世界」(一五頁)、「一九世紀末と二〇世紀初頭のバルカン諸国と国際関係」(二七頁)、「第一次世界大戦」(二三頁、うちセルビアなど一三頁)、「両大戦間期の世界」(一七頁)、「両大戦間期のユーゴスラヴィア」(一七頁)、「第二次世界大戦」(四五頁、うちユーゴスラヴィアなど二五頁)、「第二次世界大戦後の世界」(二二頁)、「第二次世界大戦後のユーゴスラヴィア」(二八頁)。全体の構成はセルビアの教科書とほぼ同じであるが、世界史(八三頁、四六%)とバルカン史またはユーゴスラヴィア史(九七頁、五四%)に二分され、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ史の要素は少ない。連邦側の教科書に比べてユーゴスラヴィア全土を視野に入れた記述が多く、文化史についてもその傾向が顕著に見られる。<sup>(52)</sup>なお、このほかの学年の教科書でも、南スラヴ人の歴史、あるいはバルカン史として描く姿勢は一貫している。七年生向け教科書には「中世前期の南スラヴ人」、「中世後期のセルビア諸邦と近隣諸国」、「オスマン征服時代のバルカン諸国」、八年生向け教科書には「一五世紀末から一八世紀末までのトルコ、オーストリア、ヴェネツィア支配下の南スラヴ諸民族」、「一八世紀末から一九世紀初頭にかけてのバルカン半島」、「一九世紀半ばからベルリン会議までの南スラヴ諸民族」といった項目(章)がある。<sup>(53)</sup>連邦側の教科書とは異なり、ボスニア・ヘルツェゴヴィナという国家の枠組みを必ずしも重視してはいないように見える。ボスニア・ヘルツェゴヴィナの歴史がセルビア人やクロアチアと不可分であること、またバルカン各地にセルビア人が散在していることなどを背景に、現在の旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書の中でもっとも強く「地域史」を

意識したものと考えられる。

もつとも、それは相対的なものでしかなく、クロアチアのように極端な形ではなくとも、新たな「国民史」への書き換えが進行していることに違いはない。ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいても、紛争直後に指摘された「三つの民族集団すべてが過去、伝統を、それぞれにとつて望ましい新たな民族的価値の枠組みとして再定義し」、「現在にとつて政治的に都合の良い過去が新たに構築されている」<sup>(54)</sup>という状況に何からの変化があったのか、なお検証が必要であるように思われる。

### むすびにかえて

本稿で考察してきたことから、学校教科書、とくに歴史教科書の「脱ユーゴスラヴィア化」は各国とも程度の差こそあれ着実に進展しているが、それにかわる広域的・跨境的な「地域史」の視点は獲得できず、やや偏狭な「国民史」の側面だけが強められていることが確認された。かつてのユーゴスラヴィア諸民族が教科書に登場する頻度は非常に低くなり、断片的な情報しか与えられず、とくに現代史では敵対的に描かれることも少なくない。一九九〇年代後半から各国の研究者・教育者らが集まり、さまざまなシンポジウム、学会等、歴史教科書問題などを討議する機会が頻繁に設けられ、実際にカリキュラムの改訂作業が進んできたにもかかわらず、その成果はきわめて限定的なものにとどまっている。

一方では、各国の歴史教科書はなお移行期的な性格を持ち、内容の見直しが頻繁に試みられている。それは、必ずしも融和的な動きとは限らず、第二次世界大戦や一九九〇年代のユーゴスラヴィア紛争の再評価が各国・各民族の敵対感情を再燃させてしまう危険性もある。実際、有力政治家による歴史修正主義ともとれる言動も目につくようになった。<sup>(55)</sup>スニエジナ・コレンは、とくにクロアチアにおいて歴史教育が政治的に利用されることについて悲観的な見通しを述べている。<sup>(56)</sup>日本を含む東アジア諸国にとつても、参考にすべき点は多いように思われる。

本稿では、紙幅の制約からセルビア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの歴史教科書の、しかも限定的な事例の分析しかできなかった。とくにクロアチア以上にバルカンへの帰属意識の低いスロヴェニアや新興国として新たなカリキュラムの導入に取り組んでいるコソヴォも視野に入れる必要がある。また、もつとも各国・各民族のナショナルリズムを反映していたとされる一九九〇年代の学校教育・教科書の移行期の問題にも触れられていない。これらを今後の課題として、学校教育・教科書における国民史と地域史の問題に取り組んでいきたい。

## 注

- (1) ユーゴスラヴィア連邦の分裂・解体に関しては多くの論考がある。とくにクロアチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナの紛争に関しては、月村太郎『ユーゴ内戦 政治リーダーと民族主義』(東京大学出版会、二〇〇六年)が詳しい。歴史的背景に関しては、柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』(岩波新書、一九九六年)や久保慶一『引き裂かれた国家 旧ユーゴ地域の民主化と民族問題』(有信堂、二〇〇三年)を参照。
- (2) モンテネグロの動向に関しては、池田佳隆『モンテネグロの独立とヨーロッパ統合』『大阪教育大学紀要 第II部門 社会科学・生活科学』五六(二〇〇七年)、一〜一四頁が詳しく。
- (3) コンヴォは二〇〇八年二月一七日にセルビアからの独立を一方的に宣言し、現在では国連加盟一九三か国のうち一一一か国がこれを承認している。コンヴォ外務省のサイト (<http://www.mfa-ks.nev>) 等を参照。
- (4) クロアチアの歴史家ネヴェン・ブダクは、一九八〇年代半ばにユーゴスラヴィアの各共和国・自治州で使用されていた全ての歴史教科書に登場する人名はわずか二二名と極端に少なく、チトーへの言及の頻度も大きく異なることなどを指摘している。Neven Budak, "Post-socialist Historiography in Croatia since 1990," Ulf Brunnbauer, ed., *(Re)Writing History: Historiography in Southeast Europe after Socialism*, Münster: LIT Verlag, 2004, pp.158-159.
- (5) スニエジヤナ・コレン「教科書の中の地域史——クロアチアの事例——」柴宜弘編『バルカン史と歴史教育——「地域史」とアイデンティティの再構築』(明石書店、二〇〇八年)、一二三頁。なお、この論文集には、クロアチアの他にもセルビア、アルバニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モルドヴァ、スロヴェニア、ギリシアの事例報告が収録されており、バルカン諸国における歴史教育・教科書問題の概要を日本語で知ることができる基本文献となっている。
- (6) 同、一二三頁。
- (7) 同、一二五頁。
- (8) 柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史』、一三五頁。
- (9) 旧ユーゴスラヴィア連邦時代には小学校は八年制、中学校は二十二年制であったが、多くの国々で小学校は九年制(クロアチアなど例外もある)、中学校は四年制に移行している。詳しくは、石田信一「東ヨーロッパにおける学校教育制度と歴史教育の現状——旧ユーゴスラヴィア諸国を中心に」『跡見学園女子大学文学部紀要』四七(二〇一二年)、一〜一四頁を参照。
- (10) Ana Tomljenović, "Slika Hrvata u srpskim i Srba u hrvatskim udžbenicima povijesti za osnovu školu," *Povijest u nastavi*, Vol.X, No.19 (1), Zagreb, 2014, pp.1-32 参照「小学校歴史教科書にみるセルビアのクロアチア人像とクロアチアのセルビア人像」。
- (11) 主として二〇〇〇年代までの状況については、石田信一「国民史の枠を超える試み——旧ユーゴスラヴィア諸国の歴史教科書にみる地域史」柴宜弘・木村真・奥彩子編『東欧地域研究の現在』(山川出版社、二〇一二年)、二八六〜三〇四頁を参照。また、バルカンにおける地域史構築の試みに関する論者として、柴宜弘「バルカンにおける共通歴史教材づくり——『バルカンの歴史:バルカン近現代史の共通教材』から考える」『歴史学研究』九一九(二〇一四年)、一八〜二三頁などがある。
- (12) Biljana Danilović et al., *Poznavanje društva za 4. razred osnovne škole*, Novi Sad: Zavod za izdavanje udžbenika, Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 1988.
- (13) ベオグラードなど各々の郷土誌に関しては、すでに小学校三年生向けの「自然と社会」において副読本を利用しながら学んでいるため、「社会知識」で

- は薩の領地なごうごの国をさる。 Sava Stekić et al., *Naš kraj. Beograd i okolina. Priručnik iz prirode i društva za III razred osnovne škole*, peto izdanje, Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 1989.
- (14) Božidar Stanišić et al., *Geografija Jugoslavije sa osnovama socijalističkog samoupravljanja za VIII razred osnovne škole*, sedmo izdanje, Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 1987; Slavoljub Cvetković et al., *Istorija sa osnovama socijalističkog samoupravljanja za VIII razred osnovne škole*, četvrto izdanje, Beograd: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 1987.
- (15) Božidar Stanišić et al., *Op. cit.*, p.5.
- (16) Ibid., p.4.
- (17) Ibid., p.11.
- (18) Slavoljub Cvetković et al., *Op. cit.*, p.109.
- (19) Alfonso Cyrilanović et al., *Svijet danas 4: udžbenik zemljopisa za VIII. razred osnovne škole*, II. izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1988.
- (20) Ibid., p.175.
- (21) Ibid., p.175.
- (22) Ibid., pp.24-25. 近隣諸国のうち、アルバニアとギリシアは同じ「地中海諸国」に、またルーマニアとブルガリアは「ヨーロッパ大陸部」に含まれてゐる。
- (23) Rene Lovrenčić et al., *Čovjek u svom vremenu 4: udžbenik povijesti za VIII. razred, Zagreb: Školska knjiga*, 1987.
- (24) Velimir Dorošijev et al., *Atlas prirode i društva za treći i četvrti razred osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 1987, pp.26-31.
- (25) Ivo Makek et al., *Čovjek u svom vremenu 2: udžbenik povijesti za VI. razred osnovne škole*, IV. izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1988; Dragutin Pavličević et al., *Čovjek u svom vremenu 3: udžbenik povijesti za VII. razred osnovne škole*, III. izdanje, Zagreb: Školska knjiga, 1988.
- (26) Dragutin Pavličević et al., *Op. cit.*, pp.188-199.
- (27) Izvod iz registra odobrenih udžbenika – Katalog udžbenika za predškolsku ustanovu i osnovnu školu odobrenih za školsku 2015/2016. godinu. ヤーゴト共和国教育・科学・技術開発省のホームページ (<http://www.mpn.gov.rs/>) より。歴史教科書に限って言えば、小学校五年生向け八種類、六年生向け五種類、七年生向け八種類が、この「教科書目録」に掲載されてゐる。
- (28) Dunja Svilar Dujković et al., *Istorija 8. Udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Eduka, 2013.
- (29) Ibid., pp.114-117.
- (30) Predrag M. Vajagić et al., *Istorija 8. Udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Beograd: Klett, 2010, pp.122-125.
- (31) Ibid., pp.189-192.
- (32) Marko Šuica et al., *Istorija za šesti razred osnovne škole: udžbenik, istorijska čitanka, radna sveska*, Beograd: Freska, 2010.
- (33) Radoš Ljušić, *Istorija za sedmi razred osnovne škole: udžbenik, istorijska čitanka, radna sveska*, Beograd: Freska, 2010.
- (34) この時期の問題を含めて、クロアチアにおける歴史教科書の変遷について、Stefano Petrungaro, *Pisati povijesti iznova. Hrvatski udžbenici povijesti 1918.-2004. godine*, Zagreb: Strednja Europa, 2009 を詳読。
- (35) クロアチアの学習指導要領の変化については、石田信一「クロアチアにおける学習指導要領と現代史教育」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』四(二〇〇六年) 五〇〜六一頁参照。
- (36) 歴史教科書の改訂は頻繁に行なわれている。アルファ社の小学校八年生向

- け歴史教科書の事例では、当初（一九九六年以降）はイヴォ・ペリチ (Ivo Perić) が執筆したものを長く使用していたが、二〇〇四年からヨシブ・ユルチェヴィチ (Josip Jurčević) が執筆したものの、二〇〇七年からステイエン・ベカヴァツ (Stjepan Bekavac) が執筆したものに変わった。もっとも、このベカヴァツらの教科書は二〇〇八年に共同執筆者をかえて新版となり、さらに二〇一四年から共同執筆者は同じだが体裁を大きく変えて再び新版となった。
- (37) Kresimir Erdelja et al., *Tragom prošlosti 8: udžbenik povijesti u osmom razredu osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2014; Stjepan Bekavac et al., *Povijest 8: udžbenik za osmi razred osnovne škole*, Zagreb: Alfa, 2014.
- (38) 二〇の教科書の視点の違いは、Snjezana Koren, "Nastava povijesti između historije i pamćenja. Hrvatski udžbenici povijesti o 1945. godini," Sulejman Bosto et al. eds., *Kultura sjećanja: 1945. Povijesni lomovi i svladavanje prošlosti*, Zagreb: Disput, 2009, pp.239-264 参参照。
- (39) Stjepan Bekavac et al., *Op. cit.*, pp.69-72.
- (40) *Ibid.*, p.84.
- (41) Kresimir Erdelja et al., *Op. cit.*, p.246.
- (42) *Ibid.*, pp.244-245. 現行の小学校・中学生向け歴史教科書（四種類）の中でサライェヴォ・オリンピックに触れているものは一つもない。
- (43) シュコルスカ・クニガ社の教科書は、クロアチア国内の少数民族としてのセルビア人とイタリア人の歴史を紹介している (Kresimir Erdelja et al., *Tragom prošlosti 7: udžbenik povijesti u sedmom razredu osnovne škole*, Zagreb: Školska knjiga, 2014, pp.83-85)。また、プロフィール・インターナショナル社の教科書は、一九世紀前半のスロヴェニア人の民族運動を取り上げている (Damir Agić, *Vremeplov 7: udžbenik povijesti za sedmi razred osnovne škole*, Zagreb: Profil International, 2014, pp.69-70)。
- (44) Dragutin Feletar et al., *Geografija 4. Udžbenik za četvrti razred gimnazije*, Samobor: Meridijani, 2014, p.11.
- (45) ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける歴史教育の現状に関しては、ソニー・ドゥイモヴィチ「ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおける歴史教育」柴田弘編『バルカン史と歴史教育——「地域史」とアイデンティティの再構築』(明石書店、二〇〇八年)、一六二—一六九頁を参照。また、やや視点は異なるものの、教育現場での実情に関しては、大平剛『学校教育にみるボスニア・ヘルツェゴヴィナの平和構築の現在』(平和構築研究会、二〇〇六年)も参考になる。
- (46) Federalno ministarstvo obrazovanja i nauke, *Spisak otkrivenih radnih udžbenika, udžbenika, priručnika, radnih listova i zbirki zadataka za osnovne škole, gimnazije i srednje tehničke i stručne škole u školskoj 2015/2016 godini*. (<http://www.mnon.gov.ba/>); Kanton središnja Bosna, Ministarstvo obrazovanja, znanosti, kulture i sporta, *Popis obveznih udžbenika i pripadajućih dopunskih nastavnih sredstava na hrvatskom jeziku u BiH za školsku godinu 2015./2016. za devetogodišnje osnovne škole, osmogodišnje osnovne škole, gimnazije, strukovne škole*. (<http://www.mozk.s-kb.ba/>); Republički pedagoški zavod Republike Srpske, *Spisak obaveznih udžbenika za osnovnu školu u školskoj 2014/2015. godini*. (<http://www.rpz.rs.org/>).
- (47) 例えば、小学校・中学生向け歴史教科書はサライェヴォ・パブリッシング・クレット、ボサンスカ・リイェチ、セザム、ヴリイェメ、スヴィエトロスト、ボサンスカ・クニガの七社・八種類、同じく八年生向け歴史教科書は上記のうちクレット社とセザム社を除く五社・六種類が存在する。ヴリイェメ社が両学年で二種類の教科書を出している。
- (48) Izet Šabotić et al., *Historija 9. Udžbenik za deveti razred devetogodišnje*

- osnovne škole*. Tuzla: NAM, Zenica: Vrijeme, 2012.
- (8) Ibid., pp.148-150, 177.
- (9) Izet Šabotić et al., *Historija 7. Učbenik za sedmi razred devetogodišnje osnovne škole*, Tuzla: NAM, Zenica: Vrijeme, 2010; Izet Šabotić et al., *Historija 8. Učbenik za osmi razred devetogodišnje osnovne škole*, Tuzla: NAM, Zenica: Vrijeme, 2011. (11) は小学校九年生向けで同シリーズの教科書を参照した。これは本文中にラテン文字とキリル文字を混在して用いている(11)でも、この多民族国家に特徴的な教科書といえる。
- (15) Ranko Pejić et al., *Istorija za 9. razred osnovne škole*, Istočno Sarajevo: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 2010.
- (16) Ibid., pp.110, 190-191.
- (17) Rade Mihaljičić, *Istorija za 7. razred osnovne škole*, Istočno Sarajevo: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 2010; Željko Vujadinović et al., *Istorija za 8. razred osnovne škole*, Istočno Sarajevo: Zavod za udžbenike i nastavna sredstva, 2010.
- (18) ノーニャ・トヴァイモヴィチ、前掲論文、一六三頁。
- (19) クロアチアでは、クロアチア民主同盟のトミスラヴ・カラメルロ党首が、この発言を繰り返している。TOMISLAV KARAMARKO: Tjevica i socijaldemokracija u Hrvatskoj ne postoje. Postoje jugoštija i jugonostalgija!, *Večernji list*, 15.06.2014 (<http://www.vecernji.hr/>); KARAMARKO: Josip Broz Tito je samo zločinac!, *Dubrovački vjesnik*, 23.08.2014 (<http://dubrovacki.hr/>).
- (19) Dušan Komarčević, "Istorija, povijest: Mržnja u školskim udžbenicima," *Radio Free Europe / Radio Liberty*, 24.04.2015 (<http://www.slobodnaevropa.org/>).